

# 京都市の近代化遺産

—京都市近代化遺産（建造物等）調査報告書—

近代建築編

2006

京都市文化市民局

## 御 挨拶

この度刊行致します「京都市の近代化遺産—京都市近代化遺産（建造物等）調査報告書—近代建築編」は、平成8年度から平成14年度に実施致しました「京都市近代化遺産調査」の成果をとりまとめたものです。

これにより、既に刊行されている「産業遺産編」と合わせて、2分冊の報告書として完結する運びとなりました。

近代化遺産の多くは、産業構造の変化や都市の再開発などにより、存続が難しくなりつつあります。このため、京都市では、京都市文化財保護条例や、国の文化財登録制度等に基づき、建築物や土木構築物等の近代化遺産の積極的な保護に努めています。

今回、建造物を主体とした総合的な調査を実施致しましたところ、本市の近代化遺産の所在の確認とその文化財的価値の把握を行うことができ、その現況が明らかになりました。

今後は、この報告書に基づき、近代化遺産のより一層の保存と活用を推進して参ります。

結びに、この調査に御協力をいただきました所有者や関係機関の皆様、報告書の作成をお願い致しました京都市近代化遺産調査会の皆様、そして調査に携わっていただきました皆様に、心から御礼申し上げます。

平成18年6月

京都市長 **柿本 頼業**

## はじめに

平成11～14年度に京都市近代化遺産調査会は市内の近代化遺産の調査を実施しました。その調査結果を産業遺産編と近代建築編に分けて報告書をまとめ刊行することになり、さきに産業遺産編を平成17年7月に刊行しています。近代建築編は金融、商業の第3次産業、宗教、教育、文化・劇場、医療そして住宅の多様な各分野からなり、調査件数も多くなりましたところから、ここに遅れ刊行するはこびとなりました。

本調査に先行して市内の近代化遺産の文化財登録が着手されていて、本年3月までに174件が登録されていますが、今回の調査成果を踏まえて登録件数は今後さらに増加するものと思われまます。

このたびの調査においてそれぞれの分野を担当していただき、現地調査に幾度か足を運ばれ、図面にまとめ、写真の撮影、執筆などに多くの労をかけていただいた調査員の各位ならびに調査先の所有者や関係者の方々にご無理をお願いし無事調査を終えることができましたこと、厚くお礼申し上げますとともに感謝の意を表したいと思ひます。

このたびの調査を通じて市内の近代化遺産の所在とそれらの評価が明らかになり、今後における遺産の保存と活用がより進展しますことを強く期待し、さらに本報告書がより有効に利用されますことを切に望みたいと思ひます。

平成18年6月

京都市近代化遺産調査委員会

代表者 川上 貢

# 第1章 調査事業の概要

## 第1節 調査要領

## 第2節 調査組織

### 第1節 調査要領

#### 1 調査目的

近来、近代化遺産の評価がなされつつある。文化財保護行政においても、近代の文化財を中心として、その緩やかな規制による保護を目指した文化財登録制度が定着しつつある。

本調査は、江戸時代末期から第二次世界大戦終戦までに、京都市の近代化の過程で造られた産業遺産、土木遺産、また教育・文化、商業、生活に関する建造物と機械器具類等の総合的な調査を実施し、今後の文化財的な保護措置を図るための資料の作成を目的としている。

#### 2 調査対象

- (1) 江戸時代末期から第二次世界大戦終戦までに造られたもの
- (2) 近代の技術的手法によって造られた建造物、機械器具類で、産業、交通、土木に関わるもの
- (3) 京都市の近代化、近代都市としての発展に寄与し、あるいは示すもの

住宅建築は、洋風意匠を用いるもの、近代の工法によるものを取りあげるが、京都の近代都市としての展開において重要な位置を占めるものについては一部、和風住宅も取り上げている

寺社建築に関しては、近代の建造物のうち、都市史的に見て重要なものや、建築家の設計になるものについて対象に含めている。

#### 3 調査方法及び内容

##### (1) 分布調査

京都市文化財保護課が委託調査として実施した次の調査の成果を基礎とし、補足を加えて、分布調査に代えた。

##### ○近代化遺産分布調査(平成8～10年度)

調査団体：京都古建築研究会(代表者 藤澤彰)  
調査協力者：田中禎彦、細谷豪(当時、京都大学大学院博士課程)、青山元喜、入谷裕加江、岡村和輝、小倉基弘、岸泰子、久保和貴、甲田拓、笹岡隆平、瀬戸隆之、高木美江、竹口泰生、田村景子、登谷伸宏、中筋正浩、中田達也、野村光広、林仁、福田容明、星秀樹、湯浅晃一(当時、京都大学大学院修士課程)、奥田光昭、前後翼、村井大介(当時、京都大学学部生)

##### ○近代洋風建築調査(平成9～10年度)

調査団体：京都近代建築調査会(代表者 中川理)  
調査協力者：川島智生(当時、京都工芸繊維大学大学院博士課程)、白木正俊(京都市政史編さん助手)、大菅直(当時、京都工芸繊維大学大学院修士課程)、井上明彦、飯田志織(当時、京都工芸繊維大学学部生)

##### ○旧小学校建築調査(平成9～10年度)

調査団体：建築まちなみ研究会(代表者 大場修)  
調査協力者：山田智子(京都文教短期大学助教授)、中間彩佳、金井昌隆、木名瀬佳代、和田彩乃、王易、裴蕾(当時、京都府立大学大学院修士

課程), 大久保里美, 兼村まゆみ, 仲西達彦(当時, 京都府立大学学部生), 竹田奈津子(京都府立大学卒業生)

分布調査で確認した遺構件数は, 約2,000件であり, 本報告書では, 産業遺産編に該当する種別の調査物件を一覧表として掲載した。

なお, 分布調査票サンプルを本章末尾に掲載している。

#### (2) 詳細調査物件の選定

約400件の主要な近代化遺産を選定し, 詳細調査を行うこととした。

#### (3) 詳細調査

詳細調査を実施するに当たっては, 以下の項目を主眼とした。

調査内容: 分布調査の確認と修正

- 資料調査
- 平面図, の作成
- 遺構の写真撮影
- 詳細調査票の記入

なお, 詳細調査票サンプルを本章末尾に掲載している。

### 4 調査報告書の作成と資料保存

#### (1) 調査報告書の作成

調査の結果を報告書として500部刊行し, 大学, 政令市等の教育委員会, 公立図書館等に配布し, 活用を図るとともに, 今後の保護・保存対策の資料とする。

#### (2) 資料保存

分布調査票, 詳細調査票, 詳細調査成果(図面, 解説文, 写真, 資料写し等)は, 京都市に保存する。

## 第2節 調査組織

### 1 京都市近代化遺産調査委員会

建築, 土木, 機械等を専門とする研究者8名を委嘱し, 京都市近代化遺産調査委員会を組織した。同委員会において, 詳細調査の方法, 詳細調査物件の選定等についての審議を行った。

調査委員会委員

委員長

川上貢(京都大学名誉教授)

委員(五十音順)

石田潤一郎(京都工芸繊維大学教授)

大場修(京都府立大学教授)

田中尚人(熊本大学助教授)

中川理(京都工芸繊維大学教授)

藤澤彰(芝浦工業大学教授)

松村博(財団法人阪神高速道路管理技術センター理事)

三宅宏司(武庫川女子大学教授)

### 2 詳細調査の実施

詳細調査は京都市近代化遺産調査会(代表川上貢)に委託し, 実施した。

詳細調査では, 次の調査協力者の協力を得た。

登谷伸宏, 星谷豪, 岸泰子(当時, 京都大学大学院博士課程), 円満寺洋介(円満字建築事務所), 山田智子(京都文教短期大学助教授), 松田法子(当時, 京都府立大学大学院博士課程), 笹欣也, 高橋清香, 藤本智子, 東めぐみ, 王易(当時, 京都府立大学大学院修士課程), 陳雲蓮(当時, 京都府立大学研究生),

桐浴邦夫, 光本大助, 浅井要子, 亀山芳香, 田畑美代子, 湯谷美奈(古材文化の会)

## 74 京都府立鴨沂高等学校校舎，図書館，体育館，屋内プール，地下道出入口

- 【構造形式】校舎：鉄筋コンクリート造3階建／図書館：鉄筋コンクリート造 階建／体育館：鉄骨鉄筋コンクリート造2階建／屋内プール：鉄骨造平屋建／地下道出入口：鉄筋コンクリート造平屋建
- 【設計施工】設計：京都府営繕課（技師：十河安雄）／施工：戸田組
- 【竣工年次】校舎（本館，特別教室棟），体育館，地下道出入口：昭和9年／  
校舎（普通教室棟）：10年／屋内プール：昭和8年／図書館：昭和13年

明治5年，上京区土手町通丸太町下ルの九条家河原町邸の敷地，建物を利用して開校した新英学校女紅場が前身である。同33年，現在地に移転した。この時，門，茶室，作法室を旧校舎から移築した。明治37年，京都府立第一高等女学校となる。昭和23年に新制高校に移行し，府立鴨沂高等学校となった。

明治33年移転時の新築校舎は昭和に入ると老朽化が目立ち校舎改築が計画された。昭和8年には屋内プールが竣工。同9年には，第一期工事として本館，特別教室棟（北側），体育館が竣工し，第二期として普通教室棟（南側）などが同10年に竣工している。また，昭和13年に図書館が建築された。

改築に際しても，木造の正門は学校のシンボルとして，修理の上残された。この時，正門との調和を図るデザインで，寺町通りとを画する鉄筋コンクリート造の塀も建築されている。

本館及び教室棟は，通りからセットバックして，正門との間に前庭を設けて建つ。正面を御所の位置する西側に向け，中央に本館棟，左には特別教室棟，右に普通教室棟が接続する，ほぼコの字型の左右対称の構成をとる。鉄筋コンクリート造3階建（一部地下1階）で，本館及び特別教室棟が昭和9年に竣工し，普通教室棟が同10年に竣工している。

校舎外観は，全体として，モダニズムのデザインとする一方，和風の緩い勾配屋根を架け，本館中央の車寄せ上部には和風の千鳥破風の意匠が取り付けられている。ただし，3階上部の庇に遮られ，近距離では地上面から勾配屋根を望見できないという外観意匠の矛盾が見られる。

本館は，左右の階段室の窓を垂直線として表すなど，垂直方向のラインを強調している。3階上部に

は，3階講堂の採光のためアーチの小窓が連続して設けられる。一方，両側に接続する校舎棟は，庇，窓台によって各階を水平に分割し，水平ラインを強調した外観となっている。外壁には，腰部分や本館の玄関回りに黄身がかかった「竜山石」，中央窓の周囲に白色の「紫雲石」を貼り，また着色モルタルやコルク粉入モルタルなどを用いて，落ち着いた色調とし，かつ微妙な色調の変化を付ける工夫が見られる。尚，本館外壁についても，設計時点の「釉薬磁器タイル貼」からモルタル仕上げに変更されている。

設計を担当した京都府営繕技師・十河安雄は，①御所・御苑を覗き見ることができないよう平面に配慮したこと，②御所・御苑に隣接し，かつ風致地区に位置するため，外観に日本趣味意匠を採用したこと，③学校の歴史に配慮し外観の材料・色調を選択したこと，などを述べている（昭和11年竣工式典・工事報告）。こうした意図に基づき，コの字型の平面配置，和風屋根を載せる意匠，外壁の素材・色調の選択がなされたと考えられる。

平面は，本館1階では中央に廊下を配し，両側に教員室，事務室を置く。2階では廊下両側を教室とする。3階は講堂としている。南北の教室棟では，北側校舎では南側に，南側校舎では北側に廊下を配し，教室を並べている。内部意匠は装飾のない直線的なデザインだが，親柱など階段廻りには曲面を用いている。

体育館は，鉄骨鉄筋コンクリート造で一部2階を設ける。モダニズムの外観で，丸窓を付ける。

屋内プールは，校舎改築計画の第一段として竣工したもの。昭和7年のロサンゼルス・オリンピックで日本競泳陣が5つのメダルをとったことで水泳振

興の声が盛り上がり，充実したプールの建設が望まれていた。こうしたことから，ボイラーを備えた，府下校舎では初めての温水プールとなった。

通りを挟んだ北側敷地に体育館，屋内プール，屋外運動場があり，校舎との連絡のため地下道が設けられている。地下道の北側出入口は，鉄筋コンクリート造で半円曲線と円柱を造るモダニズムのデザインである。円柱の足元の立ち上がりを利用して，アーチ状のベンチが設けられている。

図書館は，鉄筋コンクリート造2階建。一連の改

築計画の仕上げとなった。モダニズムのデザインで全体をまとめているが，寺町通に面して建つ景観への配慮のためか，入口回りを石貼りで装飾し，黄身がかったモルタル仕上げとするなど，落ち着いた色調の外観としている。

当時において最大規模の校舎建築であることに加え，各建物には随所に意匠的配慮が凝らされている。昭和初期における最新の学校施設が，一連の施設群として現存している点で貴重である。

（石川祐一）



正面外観



外観



玄関外観



講堂



廊下



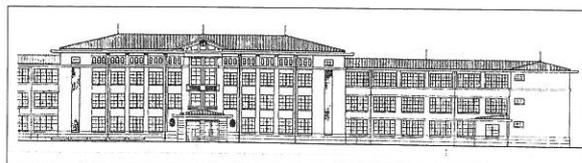
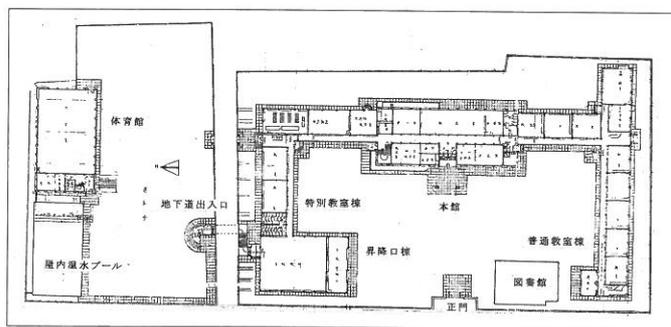
階段



体育館



図書館



上：1階平面配置図／下：校舎立面図



地下道出入口



地下道出入口内部

## 75 鴨沂会館

【構造形式】鉄筋コンクリート造3階建（一部地階付）

【設計施工】設計：京都府学校営繕（技師：十河安雄）

【竣工年次】昭和11年（1936）

鴨沂会館は，京都府立京都第一高等女学校卒業生の団体である京都鴨沂会の会館である。同女学校

は，明治5年（1872）4月に新英学校及女紅場として全国に先駆けて開校し，同15年6月，女紅場の名を

京都市上京区荒神口通寺町東入荒神町

廃して女学校となり，同20年1月には高等女学校と改称，さらに同37年，京都府立京都第一高等女学校となる。京都鴨沂会は，明治20年7月に同校の卒業生（当時155名）により組織された同窓会である（『創立五十周年記念沿革略誌』大正11年5月，より）。

昭和2年に，京都鴨沂会が主催して同女学校内に高等女学校研究科が開設された。その後，同女学校の校舎改築に伴い，同10年荒神口通りに面した現地（間口8間半，奥行22間，182坪）を買い入れ（改築積立金から1万7千円を当てる），新館を新築するとともに，従来使用していた旧館を現地の北側に移築し，修理縮小（3階建てを2階建てに改修）して新館と接続された（旧館は現存せず）。改築費は総額約6万円を要し，すべて会員からの醸金と一般篤志家の援助に依ったという（『鴨沂會雑誌』第76号，昭和10年7月，より）。

新館は，10年1月に地鎮祭，同6月起工し，翌11年4月に竣工した。鉄筋コンクリート造3階建て（一部地階），建坪約61坪，総面積約200坪。1階は玄関，広間，生徒昇降口，事務室，応接室，購買部などを配し，2階には最も広い講習室を設け，3階には会議室に加えて茶室や水屋を含む和室が木造で組み込まれている。設計に当たった京都府学校営繕技師の十河安雄によると，この茶室は，計画に際して柏村理事の指導をうけたという（『鴨沂會雑誌』第78号，昭和11年7月，より）。また，十河安雄は，

同雑誌において，新館の外観は本校である第一高等女学校との関係上，日本趣味を取り入れ「近世式」建物とした，と述べている。

同館の外観は，庇を長く張り出させ3階の階高を低く抑えるとともに2階の外壁と明確に区分して水平性を強調し，安定感のあるフォルムを構成している。しかも，1階の入口廻りは石貼りとして重厚感を添え，3階の丸窓とともに外観に変化を与えつつファサード全体を引き締めている。派手さはないものの，外観の意匠はバランスよく充実している。

内部は，階段室に比較的広く面積を割り当て，吹き抜けを設けるとともにその垂直性を強調する意匠により，さして広くない館内に広がりを与え，来館者の視線を上階へと誘導して巧みである。

鴨沂会館は，近代日本の女子教育の嚆矢となる京都高等女学校の同窓会館として長い歴史と由緒を有するとともに，現在もなお同会の本部であり日常の活動拠点として運営されている。しかも，様々な地域活動など多目的な活動の場としても広く活用されている。

特に，3階に造作された茶室は，女子教育を担った同館の成り立ちを象徴的に示すものとして重要である。

加えて，その外観構成や，内部にあつては階段室廻りの意匠性など，昭和初期の建築デザインの一端を示す好個の遺構として，建築的にも価値が高い。

（大場修）



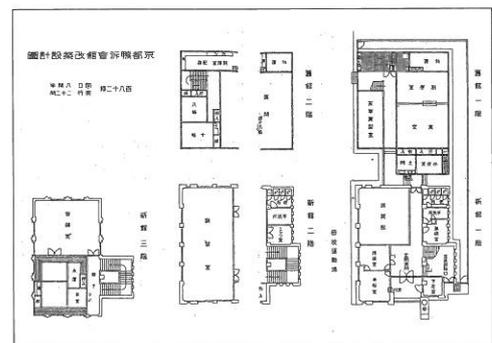
外観



階段



3階会議室



平面図（『鴨沂雑誌』より）